日本歯科医史学会々誌・第25巻
第1号通巻94号・平成15年5月

江戸幕府の口科医の各家の血縁，姻戚関係について 3[*1]

松　本　康　博[*2]

要旨：先に江戸幕府の口科医の八家の初代から幕末までの系譜を明らかにした．その際，家の継続が養子により行なわれる場合が多かった．今回，幕府の医官との間での血縁，姻戚関係を検討した．

Key words：江戸幕府，口科医，養子，姻戚関係

はじめに

先の報告[1,2]では江戸幕府の口科医は八家あり，全家が慶応，明治まで継続したことを明らかにし，その各家の系譜について検討した．その結果，家の継続のために，養子により家を継ぐ場合が多いことが明らかになった．今回，幕府の医官との間での養子ならびに姻戚関係について，検討を行った．基本的な史料としては，先の報告と同様，寛政重修諸家譜[3]，江戸城多聞櫓文書[4~6]をもとにした江戸幕臣人名事典[6]と寛政譜以降旗本家百科事典[7]，江戸幕府旗本人名事典[8]を用いて検討した．

各家の血縁と姻戚関係について

表1は口科医の各家の幕府医官との間での養子ならびに姻戚関係をまとめたものである．そのなかで，幕府の医官との間での養子と婚姻関係の最も多いのは，堀本家であった．堀本家では二代好益顕晴が養子で，好益顕晴は初代一甫重顕の娘の子供，すなわち孫であり，官医添田道策豊寿の娘と結婚している．三代好益顕承は桂川甫筑国華の娘と結婚した．寛政重修諸家譜[3]の堀本家の項では，国訓の女となっているが，誤りと思われ，桂川家の項では国訓の先代（親）である国華の娘となっている．他に同じ指摘がある[9]．四代好益彝珍は大淵友庵信教の養女と結婚している．姉妹は佐田玉庵道直と結婚した．

医官同士の姻戚関係として，桂川甫筑国華の妻は土岐重元端山の娘であり，その娘の姉妹が佐田玉庵道直の親である玉川政房の後妻になっている．堀本家，桂川家，土岐家，佐田家が姻戚関係でつながっている．

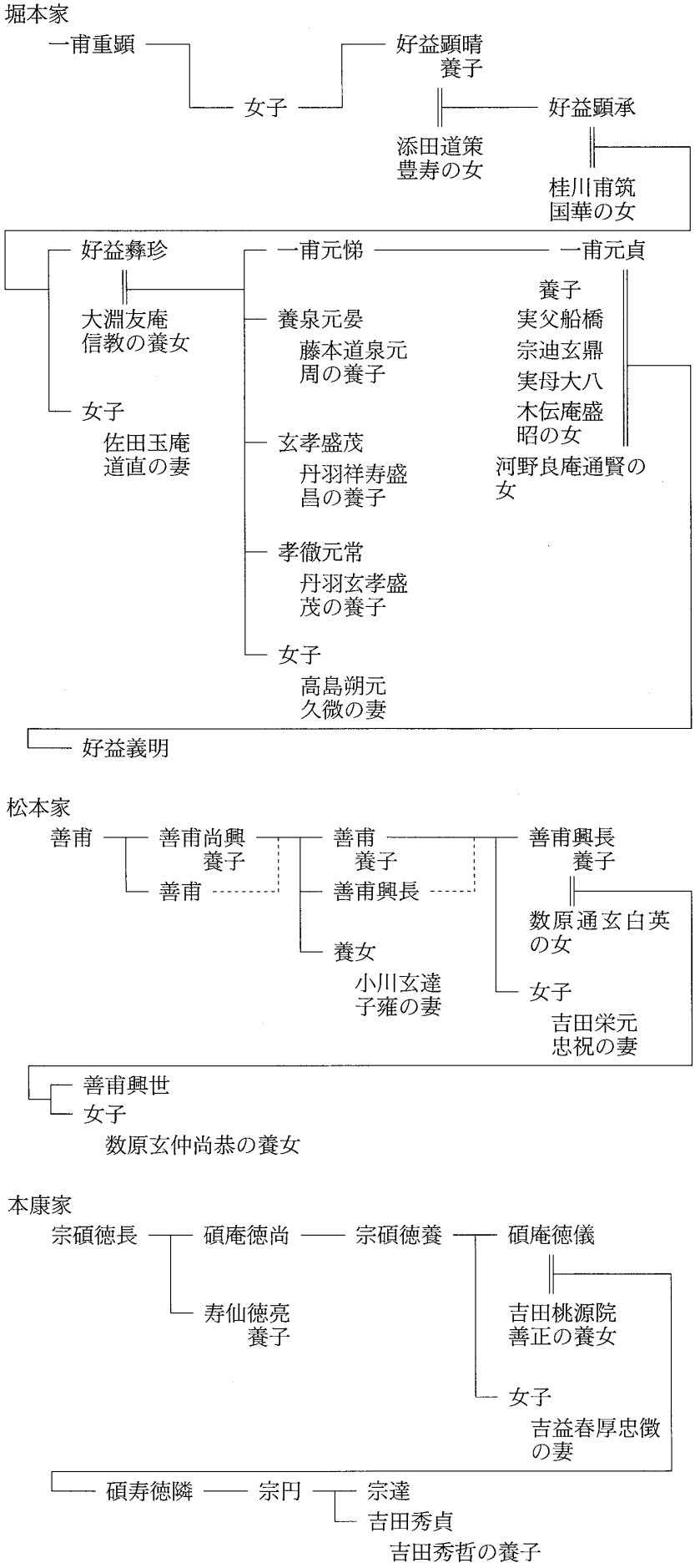
五代目では，他家への養子の例もあり，四代の次男養泉元晏が藤本道泉元周の養子になっている．四男玄孝盛茂は丹羽祥寿盛昌が病篤のために丹羽家の養子になり，寛政八年（1796）十二月に，17歳で跡をついだことが寛政重修諸家譜[3]の丹羽家の項に出ている．丹羽祥寿盛昌は寛政七年（1795）十一月に34歳で死去した．しかし，寛政十一年（1799）刊行の「寛政呈書万石以下御目見以上国字分名集」という書を基本史料とする江戸幕府旗本人名事典[8]の丹羽家の項には跡をついだ玄孝盛茂ではなく，好（孝？）徹元常（18歳）の名前があげられている．これは少なくとも寛政十一年には孝徹元常が丹羽家の家督を継いだことを表わしている．堀本家に伝わる系譜には，五男孝徹元常が寛政十一年（1799）年に四男丹羽玄孝盛茂の養子になっている．堀本家の三男は早世している．玄孝盛茂は寛政十一年（1799）には死去し

---

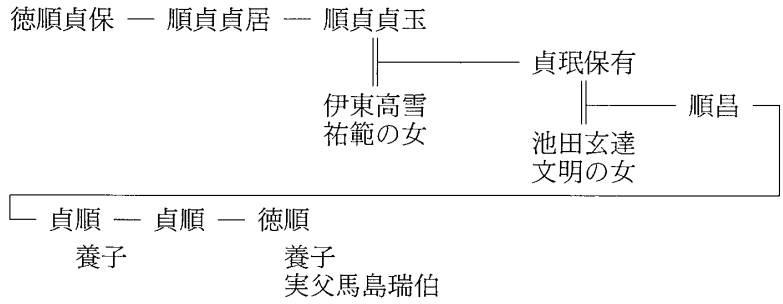
*1 Relatives of the Koukai (stomatologists) of the Edo Shognature 3

*2 Yasuhiro MATSUMOTO, Department of Oral Pathology, Tsurumi University, School of Dental Medicine　鶴見大学歯学部口腔病理学教室

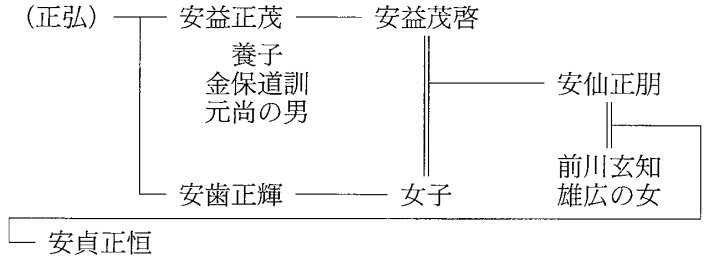
表 1　各家の血縁，姻戚関係



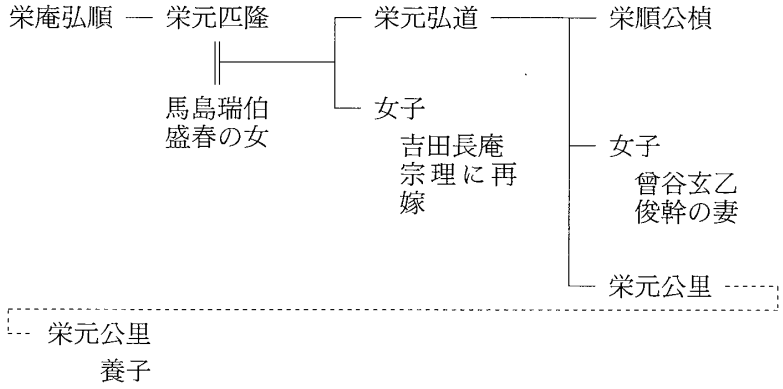
本賀家



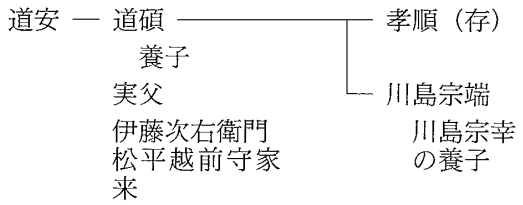
安藤家



兼康家



佐藤家



ていると思われ，寛政譜以降旗本家百科事典[7]にも，「玄孝は寛政十一年には死去か」と出ている．玄孝盛茂は若年で死去しており，家の継続の困難さが推測される．姉妹は医官の高島朔元久微と結婚している．

家の相続について[8]，幕府の初期には嗣子の届け出前に当主が急逝すると家は断絶となったが，その後は，当主が17歳以下50歳以上では認められないが，その間の年齢では，当主の急逝後の養子でも認められるようになったという．当主が17歳以下で死去すると家が断絶する危険があるので，年齢を実際より数年加算して届ける習慣が生じたとしている．さらに相続について，なんらかの事情で健在な実子を病弱として廃嫡し他家より養子を迎えたり，婿養子に入っても子供がなく，先代と血縁がない男子が家を継いだり，急養子として全く他家の人が継承するなど，血縁関係のない相続が多い[8]とのことである．

六代目は養子を迎えている．六代一甫元貞の実父は医官の船橋宗迪玄鼎，実母は医官の大八木伝

庵盛昭の娘で，妻は医官の河野良庵通賢の娘であった．これは血縁関係のない相続の例であろうか．これをみると，医官同士で幅広く複雑な姻戚関係を構成していることがうかがわれる．

五代まで口科医であった松本家は，二代善甫尚興は養子で，三代は初代善甫の子供で二代善甫尚興の養子になっている．四代は善甫興長で二代善甫尚興の次男である．善甫尚興の養女は医官小川玄達子雍の妻になっている．その娘が大八木伝庵盛昭と結婚している．三代善甫の娘は医官吉田栄元忠祝の妻となっている．松本家，小川家，大八木家，堀本家，吉田家が姻戚関係になっている．四代善甫興長は医官数原通玄白英の娘と結婚している．可馬遼太郎の小説「胡蝶の夢」[10]では，善甫興長はこの数原家から養子に入ったとしているが，寛政重修諸家譜[3]の数原家の項をみてもそのような記載はない．小説上の虚構であろうか．しかし，数原家とは屋敷も隣同士であり[10]，姻戚関係も濃く，五代善甫興世の姉妹が数原通玄白英の義弟で分家の数原玄仲尚恭の養女になっている．改易後の六代には数原家の親類である大沢良庵が養子に入っている[10,11]．

養子の二代善甫尚興は，寛政重修諸家譜[3]の松本家の項には，婿養子の記載がなく，血縁関係のない相続であろうか．寛政重修諸家譜[3]には某氏の男とし，実父の名前は記載されていないが，別の史料から[12]，吾妻春庵の子供であることが知れる．某氏の男として名前を記さないのは，旗本あるいは各大名の家臣でないためのようであり，吾妻春庵の詳細は不明である．これは仲継ぎ養子[13]の例と思われる．仲継ぎ養子とは実子があっても，幼少で家業未熟の場合，弟子を養嗣子にすることがあり，養嗣子は家督を実子に譲らず，養父の実子に譲るという．

養女の記載が多くあり，松本家の二代善甫尚興の養女が小川玄達と結婚，堀本家でも，四代好益彝珍は大淵友庵信教の養女と本康家でも四代碩庵徳義が吉田桃源院善正の養女と結婚している．養女の場合，実際養育したのではなく，仮親であることもあり，実態は知りえない[8]とのことである．仮親の例について，森鷗外の史伝，澁江抽斎[14]のなかに述べられている．澁江抽斎は津軽藩の藩医であるが，嘉永二（1849）年に幕府の御目見医師になっている．徳川実記には，三月十五日，津軽越中守家医澁江道純初見と出ている[15,16]．弘化元(1844)年十一月六日に，抽斎は鉄物問屋山内忠兵衛妹五百と結婚している．五百は結婚するにあたり，津軽藩士比良野文蔵の養女になっている．弘前藩目付役百石比良野助太郎妹翳として届けられた[14]．

本康家は養子による相続はみられなかったが，先にのべたように四代碩庵徳儀が医官吉田桃源院善正の養女と結婚している．碩庵徳儀の姉妹は医官吉益春厚忠徴と結婚している．六代宗円の息子，吉田秀貞は医官吉田秀哲の養子になっている．もう一家の分家の本康家では医官との姻戚関係は見いだせない．六代宗仲の項[6]に，養祖父宗寿，養父栄寿，実祖父寿仙と書かれていることから，六代宗仲は五代栄寿の弟か四代宗寿の兄弟姉妹の子供と考えられる．

各家の次，三男，先代の次，三男については何々家の「厄介」と称されていて，養子にいかなければ，兄や甥の厄介として過ごすことになるという[8]．先の堀本家，本康家の他に医官の家に養子に行った例としては，佐藤道碩の息子，川島宗端が川島宗幸の養子になっている．今回，医官との間での養子のみを検討したが，医官以外の旗本家への養子も何件かある．養子を迎える側，出す側双方に必然性がある事がわかる．

本賀家では，三代順貞貞玉が伊東高雪祐範の娘と結婚し，四代貞珉保有は池田玄達文明の娘と結婚している．六代貞順，八代徳順は養子で，徳順の実父は医官の馬島瑞伯である．六代，八代の養子の詳細は不明である．

安藤家は初代安益正茂は養子で金保道訓の息子であり，妻は養父正弘の娘ではなく，血縁関係のない相続と見える．二代安益茂啓は安歯正輝の娘と結婚している．安歯正輝は初代安益正茂と義理の兄弟であり，二人の親である正弘の実子である．三代安仙正朋は医官前川玄知雄広の娘と結婚している．

兼康家では，二代栄元匹隆は医官馬島瑞伯盛春の娘と結婚している．栄元匹隆の娘は吉田長庵宗理に再嫁している．三代栄元弘道の娘は医官曾谷玄乙俊幹と結婚している．五代栄元公里は兄の四代栄順公楨の養子になっているが，「父に先立ちて死す」と，寛政重修諸家譜[3]にでている．佐藤道安家では，二代道碩は養子で，実父は松平越前守の

家来伊藤次右衛門である．佐藤文仲家の三代のなかで，史料からは養子は見られなかった．

おわりに

江戸時代は平均寿命が短いためか，嫡子が若年で死亡することが多く，家の継続のために養子を迎えていた．それも種々の形態の養子が採られていたことが明らかになった．養子も医官同志の間で行われることが多く，幅広い姻戚関係を作っていた．

文　献

1) 松本康博：江戸幕府の口科医の動向について　1, 日本歯科医史学会誌 24(4)：327-331，2002.
2) 松本康博：江戸幕府の口科医の各家の系譜について 2，日本歯科医史学会誌，投稿中
3) 続群書類従完成会：新訂寛政重修諸家譜，続群書類従完成会，東京，1964-1967.
4) 大賀妙子：江戸城多門櫓文書について　その整理状況と若干の史料の考察．北の丸 10 号，29-35，1978.
5) 内閣文庫江戸城多聞櫓文書目録　明細短冊の部，国立公文書館，1980.
6) 小西四郎（監修），熊井　保，大賀妙子（編集）：江戸幕臣人名事典，新人物往来社，東京，1989.
7) 小川恭一：寛政譜以降旗本家百科事典，東洋書林，東京，1997.
8) 石井良助（監修），小川恭一（編）：江戸幕府旗本人名事典，原書房，東京，1989.
9) 今泉源吉：蘭学の家桂川の人々，篠崎書林，東京，1965（1968），125-126 頁.
10) 司馬遼太郎：胡蝶の夢，新潮文庫，東京，1985，44 頁.
11) 鈴木要吾：蘭学全盛時代と蘭疇の生涯，東京医事新誌局，東京，1933，28 頁.
12) 鈴木　壽：御家人分限帳，近藤出版社，東京，1984，353 頁.
13) 新見吉治：旗本，吉川弘文館，東京，1973，232 頁.
14) 森　鷗外：鷗外歴史文学集，第五巻，澁江抽斎，岩波書店，東京，2000.
15) 国史大系刊行会：徳川実紀，続徳川実紀，新訂増補国史大系，吉川弘文館，東京，1937.
16) 服部敏良：江戸時代医学史の研究，吉川弘文館，東京，1978，785-895 頁.

著者への連絡先：松本康博
〒 210-0063 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3
鶴見大学短期大学部歯科衛生科